

みずき野町内会だより

創刊号

2012年8月25日(土)

発行人 守谷市みずき野5-3

みずき野町内会

会長 矢嶋 鍾美

《創刊に寄せて》

安心・安全に住める環境を

日ごろより町内会活動にご理解とご支援をいただき誠にありがとうございます。また、晩夏の候、残暑厳しい毎日が続きますが町民の皆様にはご健勝にてお過ごしいただけますよう祈念いたします。



さてこの度、7月10日の町内回覧でご案内のとおり、「町内会だより」創刊号を夏祭り特集号として発行する運びとなりました。

この「町内会だより」の目的は、毎月発行しております役員会議事録に加えて、町内の動きを町民の皆様と共有し、さらに、情報交換の機会を町民の皆様にご提供し、町民各位の相互理解を深めて、みずき野が直面する課題を解決できるように、町民全員が積極的に参加する地域風土を醸成することです。年4回の定期発行を予定しています。

思いやる心遣い



申し上げるまでもありませんが、隣近所の小さいトラブルは、お互いの思いやる心遣いで予防・解決できるものが多いと感じます。また、町民全員が積極的に参加することで福祉、防災など、直面する大きな課題も解決できるように思います。

お互いを思いやる心遣いにより、近隣トラブルを予防する風土、協力して大きな課題を主体的に解決する風土が醸成され、安心・安全に住める環境が整えられることを期待します。

「町内会だより」への投稿、および、町内会主催各種イベントへの参画を通じて町民各位が積極的に町内会活動に参加され、①誰かが運営する町内会ではなく町民全員で運営する町内会、②気づいた人が適宜動くことで問題を適切、迅速に解決できる互助的な町内会になることを願っています。

みずき野に移り住んだ第一世代から、みずき野で育った第二世代への橋渡しとしての故郷創生、さらに喫緊の課題である自主防災や福祉など、町民の皆様には是非とも主体的に参画していただきたい課題があります。各位のご理解とご参画をいただきたく重ねてお願い申し上げます。 (町内会長 矢嶋 鍾美)

皆様のご意見をいただき、随時、改善をして参りたいと考えています。また、以下のような記事を中心にしたと考えておりますので、積極的な投稿をお待ちします。 (編集局)

- ◇ 町内会の動き (創刊号は夏祭り特集)
- ◇ 自主防災、福祉計画など、焦眉の課題に関する広報
- ◇ 町民が参加しているサークルの広報 (サークル紹介、部員募集など)
- ◇ 話題の提供(趣味、健康など適宜)



みずき野夏祭り

夏祭りが7月 21日(土)、みずき野中央公園を中心に開催されました。当日は曇り空でしたが雨も降らず、良き夏祭りを迎える事が出来ました。今年も子供から熟年の皆様まで年代を超えた町民の皆様に楽しんでいただけるよう、町内で活動するサークル、班長の皆様など関係者のご協力をいただきながら準備を進めました。

蛇の列ができました。また、多くの人がおもちや手作り品などの模擬店の前に集い、楽しんでいました。

各種模擬店、イベントに加えて、婦人消防団と守谷消防署による「濃煙体験」や防災部による「水消火器体験」などの防災体験を実施しました。特筆事項は、守谷市社会福祉協議会みずき野支部が、社会福祉の重要性を訴えていた事です。少子高齢化社会での「ご近所とのふれあい」など人との絆の大切さは、これからのみずき野が取り組んでいく大きな課題と感じています。



当日は、早朝より子供達や保護者が集まり、2基の子供御神輿を担いで町内を練り歩き、お祭りの幕が開きました。

中央広場では午後3時よりイベントが始まりました。矢嶋町内会会長の開会宣言、来賓の会田守谷市長挨拶を皮切りに、保育所の小さな子供達24名が、可愛い衣装を纏って太鼓をたたき、大きな拍手喝采を浴びていました。その後、よさこい踊りやハワイアン・懐かしい歌の熱唱、かっぽれや七福神の踊り、優雅なフラダンス、豪華な景品の抽選会と続きました。



午前11時から各サークルによる飲み物やかき氷、フランクフルトや焼き鳥、焼きそば、冷やしうどん等の販売が始まり、昼頃には長



ひょうたん連による阿波踊りでは、子供や大人も一緒に加わって踊りました。フィナーレは多くの提灯の下、老若男女が輪になっての盆踊りでお祭りの幕を閉じました。



今年のみずき野夏祭りは、子供達をはじめ多くの住民を中心に他区からの参加もあり、守谷市の大きなイベントの一つとして成長して来た感があります。また、盛会裡に終えたのも、町内会を中心に各サークルの皆さんが相当前から準備され、協賛会社などの協力があつたお蔭と思います。本当にご苦労様でした。今後は、みずき野の一層の活性化の一助として推考を重ね、更に盛大な夏祭りになって行く事を心より願います。(編集担当)



かっぽれ踊り



みずき野有名人 Jリーグ柏レイソル
澤 昌克 選手
出身 みずき野3丁目
郷州小学校・FC 郷州



地域福祉ニュース

町内会便りの中で今後定期的に地域福祉に関するお知らせ「みんなの幸せ、みんなで築こう」をお伝えしていきます。今回はその第一号ということですので地域福祉の基本的な考え方について書いてみます。

最近一丁目1番地という言葉をよく耳にするようになりました。政党の政策の原点というような意味でつかわれています。しかし、私(筆者)にとって一丁目1番地は何と言ってもNHKのラジオドラマ、「あちらの角のポストからこちらの橋の袂まで、みんなの町で〜す1丁目1番地」です。調べてみたら放送が始まったのは55年前の1957年。あの頃はみな貧しかったけれどことさら地域社会だとかコミュニティだとか言わなくてもどこでも隣近所が協力するのが当りまえの「地域社会」でした。

「みんなの幸せ、みんなで築こう」第一号

そして50年たった今、農村部は過疎化や高齢化により、また都市近郊では核家族化や大規模な宅地開発により共通の価値観をもたない人の集まりが増えて、日本全国で地域社会は崩壊していきました。そして、「孤独死」「無縁社会」というようなおぞましい言葉をよく見聞きするようになりました。

みずき野は約30年前から入居がはじまり、多くの人々が既に20年以上居住しています。縁もゆかりもなかった人たちがたまたま同じ土地に住むようになったわけですが多くの先輩たちが「みずき野を故郷にしよう」と努力を重ね、夏祭りは大いににぎわいますし、老人クラブ「みずき会」は全国的にも珍しいほど活発に活動しています。その他にも多数の団体が活発な活動を展開しています。これらは先輩たちの努力の賜物ですがこれからも町

内会はこれらの活動をサポートしてみずき野全体を盛り上げていかなければなりません。それと同時にそろそろ新たなステージにも入っていかなければならない時期にも来ています。新しいステージというのは、昔から言われる「向こう三軒両隣」の交流の促進です。目指すのは55年前のラジオドラマ「一丁目1番地」の世界です。

なぜ今、ことさらに隣近所の助け合いの重要性が強調されるのでしょうか？ その一つの理由を災害対策に見ることができます。昨年3月11日皆さんそれぞれに怖い思いをしました。昔は大地震により、貯まった地盤のひずみのエネルギーが解放されるのでしばらくは大きな地震は起こらない、というような説明を受けていたように思いますが、最近はどうも様子が違います。東日本大地震により茨城南部、首都圏、東南海などの地区で大きな地震が起きる可能性が更に高まったという説明で、南関東や首都圏を震度7の激震が今後30年以内に起こる確率は70%と試算している学者もいます。我々が生きている間に震度7の激しい地震が起こると考えておいたほうがよさそうです。守谷においては津波の被害はほとんどないと思われまので、今年の

東日本大震災ではなく、1995年の阪神淡大震災の被害が参考になると専門家は言っています。圧死と焼死で6400人が亡くなり、焼失家屋7500棟、全半壊家屋274000棟、直後の同時多発火災290件です。このような状況で、自宅近くに火事が起きても消防車が来て火を消してくれるなんてことは考えられません。近所の人が協力してボヤの発生を早く見つけ、消火器を持ち寄って初期消火に当たらなければ家財を守ることはできません。また、生き埋めになり自力で脱出できなかった人が35000人も救出されていますが、消防や自衛隊、警察などにより救出されたのは10%に満たず、ほとんどは家族や隣近所の人々が重機を使えないような状態の中で力を合わせて人力で救出しています。

災害被害を軽減するためにも、高齢化が進む中で健康的な生活を続けるためにも、ご近所の助け合いは欠かせません。

住民の方々が積極的にご近所単位(小地域)の福祉活動に自ら積極的に参画して下さることを期待して、地域福祉ニュース「みんなの幸せ、みんなで築こう」の創刊号の稿を終えます。(副会長 朝倉正彦)

編集後記

隣近所の相互理解を深め、町民参加型の町内会活動を推進し、安心・安全に住める環境を整える手段として、町内の動きを広く町民の皆様にお知らせすると共に、意見交換の場となるように町内会だよりを創刊いたしました。

署名記事を原則として、政治信条・宗教に偏ることなく、ご近所が助け合う住みよい街

そして、育った子供たちが懐かしく折にふれて帰ってくる故郷“みずき野”を創生する町内会活動の広報誌となるように願っています。

よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

| | | |
|-----|------|--|
| 編集局 | 編集長 | 佐々木保昌(副会長) |
| | 編集担当 | 中村暉夫、千葉武志、奥谷康子、山下勝博、原恒子、奈良岡賢逸、(1名追加予定) |
| | 組版担当 | 鈴木正博、益子寿夫、千々松健、小菅陽子 |

